

『フランス語を教える立場から』 “The Viewpoint of a Professor of French”

戸賀崎博保

TOGASAKI, Hironyasu

私がフランス語教師としてはじめて教壇に立ったのは2年間の南フランス・モレペリエ大学・文学部での留学から帰国した1971年（昭和46年）の4月であった。桜美林大学に非常勤講師として雇われ、大学・短大を含めて週3日、5コマの担当だったと思う。

初日に英米文学科の少人数の男女共学のクラスの教壇に立ち、少し緊張しながら気負った感じで授業を進めて行った。

20名足らずの男女の学生の中に小柄で丸顔の女子学生が居て、テキストに書かれてあるフランス語の平易なフレーズを英語に訳させると、その英語の発音が基礎を踏まえていて、格調高く美しかったのを感じている。既に当初から私はフランス語と英語とを比較するという方法を無意識のうちに取っていた。

経済学部は30数名のうちほとんどが男子学生だったので、クラスを活気づかせる為に、フランス語の発音と文法を教える合間に私のフランス留学体験談を聞かせた。

南仏モレペリエ大学で知り合った色々な国の女子学生の名前を挙げてエピソードを添えると、男子学生たちは話は勿論の事、それぞれの名前の響きに興味を示した。（ボリビアのGUEISY、タイのBONGKOTとSUMALI、フランスのASTRID、ヌーヴェルカレドニアのDEWEY、インド系フランス人のMARIE-LAURENCE……）

桜美林大学は当時東京都町田市だけにあり、小田急線の町田駅からスクールバスで20分ほどの長閑な環境を誇っていた。ある日、帰宅の途中に町田駅の近くを歩いていると、自動車の中から一人の男子学生に声をかけられ、少しの間その車に乗せられて話をした事があった。

その長身で陽気な学生はMARIE-LAURENCEという響きがよほど気に入ったと見えて楽しそうに笑いながら話の合間に何度も繰り返していた。

その年（1971年）の後期から私は町田市にある玉川大学の非常勤講師も勤めることになった。玉川大学のキャンパスは小田急線を挟んだ小高い丘の上にあり、文学部に教育学科、英米文学科、外国語学科、芸術学科が置かれていた。農学部も自家製の

＜蜂蜜＞などを作ったりして地道な印象を世間に与えていた。工学部もあったような気がする。

20名ほどの男女共学のクラス編成は理想的だった。私は週に1度、文学部の英米文学科、外国語学科、芸術学科の各1コマを3クラス・3人講師体制の一人として合計3コマを受け持たされていた。

午前中の芸術学科（演劇専攻）のクラスは活気に溢れていて、大きな声で復誦し、私が発する駄洒落にも良く反応してくれた。私のクラスの中にもテレビに出ている学生が1、2名いて、自宅のテレビでそれらの学生を見つけるとなんとなく嬉しかった。

『恋人たち』という表題の教科書を使ったとき、フランス語の簡単な会話をカップルになってもらって教壇の前で読ませていた時、ある一組^{ひとくみ}の男女の学生はごく自然に腕を組んで歩き出した。すると座っていたほかの学生たちが期せずして『枯葉』のメロディーを♪ららっらーらー♪ららっらーらー♪と言葉を付けずに歌い始めたのである。カップルの学生は教科書に目を^や違^やり、恋人気分を保ちながら、たどたどしいフランス語を交わし始めた。『枯葉』は以前、このクラスで詩とメロディーを1、2度やってあったのである。

日本人の場合、外国語を朗読する時、棒読みになりがちである。文字の発音だけに気を取られていて、文章の内容にまで気が回らない。ましてや動作を伴わせることなど思いも寄らない。

演劇専攻の学生はその点において、発音に目を^{つむ}瞑^{つむ}りさえすれば惚^ほれ惚^れ惚^れする所作を実演して見せてくれる。

当時のはのんびりした雰囲気^{ふんいき}が漂^はっていて、著名なある先生などは、少人数のクラスのためか、時折喫茶店で授業をしていた。私もこうした空気に便乗して、この玉川大学のキャンパスに所属する丘の上の芝生の上で授業をしたり、又ある時は、ほかのフランス語の先生のクラスと合同で授業中にソフトボールをやったりした。

秋には恒例の「音楽祭」があり、ベートーヴェンの『第九』がフィナーレを飾っていた。

学生に混じって私も『第九』の練習に2、3度参加したが、ステージには立たなかった。

又、この学園特有の「教養行事」というのがあって、学園がその時どきの一流の公演を買い取り、教職員と学生に鑑賞の機会を無料で与えるのである。私は一度だけ、コメディーフラセーズによるモリエールの『ドレ・ファレ』^{うしろ}をかなり後の方の席で観たことがあった。

2年後の1973年（昭和48年）に桜美林大学・玉川大学と並行して私は週に一度だけ、確か火曜日の午後に2コマ、立教女学院短期大学で初級のフランス語を教える機会が与えられた。井の頭線の「三鷹台」駅で降りて1、2分の所^{ゆる}の緩やかな坂の上に淡い色の^{しょうしゃ}瀟洒な建物が建っていた。

隣接した附属の幼稚園の奥の方に中・高のキャンパスがチャペル（礼拝堂）と共に控えていた。短大の校舎は比較的新しくこじんまりとして清潔感が^{みなぎ}漲っていた。広くもなく狭くもない非常勤講師室で1、2名のネイティブスピーカーの先生方とも一緒に英語で雑談を楽しむ事が出来た。

学生は大人しく^{おとな}素直な態度で静かに授業を聴いてくれた。生気に乏しいと言えない事もなかったが、約20名のクラスの知的な視線が新米教師にとって心地よかった。

毎週火曜日の午後1時からの授業の前に、通常私は午前11時頃、「三鷹台」駅のひとつ手前の駅で降りて「井の頭公園」を散歩し、近くのレストランで昼食を取ってから登校するという心豊かな時間を持っていた。立教女学院は軽井沢に研修所を持っていた。中・高・短大の教職員が夏休み中に合同で2泊3日のキャンプを毎年行っていた。小さなグループに分かれて意見の交換を行ったり、三々五々散歩をしたり、ゲームを楽しんだり、当番ごとに理事長も学長もチャプレンも分け隔てなく食器を洗ったり、風呂に入ったりと緊張の中にも和気藹々^{わきあいあい}と親睦を深めていた。

起床の合図の鐘を鳴らす役目が最終日、3日目の朝私に回ってきた。それまで鐘はカレカレカーンと2、3回間を置いて鳴らされていたが、私は、悪戯心^{いたずら}を起こして、たった1回だけカーンと鳴らして役目を終えてしまった。朝礼の時、先生方の間から「今朝は何故鐘が1回だけだったんですか。」という質問があった。すると短大の男の先生が私に代わって、「立教女学院は中・高・短大の^{いっかん}一貫教育ですから。」と優しい声で答えてくれた。

3つの大学（桜美林、玉川、立教女学院）でフランス語の非常勤講師を勤めていた矢先に実践女子大学をあるフランス語の先生から紹介されたのである。

私は渋谷校舎の英文学科研究室まで面接に^{うかが}伺った。故小倉^{たかし}先生と故藤原^{みのる}穂先生が応対された。小倉^{たかし}先生は人懐こい表情を浮かべて、磊落^{らいらく}な声で「あなたのお父さんは金持ちなんだってなあ。」と切り出してきた。恐らく仲介者の先生から、父親からの2年間にも及ぶ私の南仏モンペリエ大学での留学費用負担の事を聞いていたのだろうと思う。側^{かたわら}に同席した藤原^{みのる}穂先生は畏ま^{かしこ}って口を噤^{つぶ}んでいた。15分ほどの雑談の後、採用の確約もなく私は家路に着いた。

1週間ほどして事務局から採用の通知を受け、なんと非常勤講師ながら週に2日、5コマの時間割が記されてあった。そこで私は、桜美林大学を辞し、その年1974年（昭和49年）の4月から実践女子大学に勤める事になったのである。当時、渋谷校舎が3、4年生の専門課程、日野校舎が1、2年生の教養課程となっていた。既に2人のフランス語の先生が日野校舎の方に非常勤講師として英文学科所属で教えていらした。一人は故小泉^{きよあき}清明先生、もう一人は小河^{おごうおりえ}織衣先生であった。小泉先生の本務校は東京学芸大学、小河先生は文京女子短期大学であった。初めてお会いした時からお二人ともヴェテラン教授の風格を備えていらした。以後20年以上に^{わた}亘って親しくお付き

合いさせて戴いた。小泉先生はダブルの背広に身を固め、縁なしのメガネの奥にちょっと悲しげな凛とした視線を投げかけ、時折真顔で冗談を言われた。「文法」の授業では学生を鍛え抜き、こまめに小テストを行い、成績一覧表を作成し、私にも見せて下さった。

「講読」ではモーパッサンとかドーズの短編を良く取り上げていらした。フランスの文化が肌に合わず、もっぱら日本趣味、とりわけ下町情緒をこよなく愛された粋な江戸っ子フレンチプロフェッサーであった。

小河織衣先生は小柄で気品のあるユニークな存在であった。パステルによるデッサン、詩作、ピアノ、ヴァイオリンまでこなす才媛である。銀座の画廊で個展を開いたり、『飛べない鳩』という詩集の出版記念パーティを催したりとこじんまりと華々しく現在も活躍されている。

最初に電話で話した時、その声が非常に若々しく親しみ易かった。実際にお会いして見ると、かなりのお年に見受けられ、その外見と声との差にちょっと驚かされた。

特にクラシック音楽が共通の話題になる事が多く、以後声楽・器楽を問わず音楽会にしばしば同行し、今日に及んでいる。

故小泉清明先生は数年後にフランス語の参考書として『英語で解説した基礎フランス語文法詳解』（駿河台出版社）を刊行された。我が意を得たりと私は特に英文学科の学生に紹介し、私自身も英語の文法と比較しながら、フランス語の文法を教室で教える際に大いに役立てている。

若き日の小泉先生の人気は後々にまで及び、例えば『実践女子大学英文学科創立（70・80）周年記念パーティ』で、出席の先生方の紹介の際の拍手は圧倒的に大きかった。退職後も『実践英文科会』主催の新年会には必ず出席されていた。最晩年には腰痛に堪えてまで教え子の前にその姿を現され、正に名物教授の面目躍如たるものがあつた。

小河織衣先生も名物教授の名にふさわしかったと言えるであろう。

旧筆族の窠柄だけあって親しさの中に気品が漂っていらっしゃる。何気ない仕草が小柄なだけに、屈託のない少女のようで憎めない。フランス語の参考書や教科書を何冊も出され、20世紀のフランス文学史であるとか、日本における修道院の研究書であるとか、決して学問研究を疎かにされない。さらに驚くべきことには『比較文学会』や『歴史学会』の事務局長なども歴任されたのである。

最近では老齡の爲、夜の音楽会などを控えていらして1年近くお会いしていない。

文京女子短期大学、東京学芸大学、実践女子大学、明星大学等でフランス語の教鞭を取られた後定年退職されて現在に至っている。

現役中は、文化の薈り高い、ほのぼのとした、親しみのある授業をされていたに違いない。時折学生たちを六本木などに案内して本格的なフランス料理であるとか、

ケーキなどを体験させていらした。

このように一方で小泉清明先生こいずみきよあきのような＜文法鍛錬型＞もあれば、他方で小河織衣先生おごうおりえのような＜文化体験型＞なごがあって、同じ大学の中で和やかに共存していた事は学生たちにとって大変幸せな事であったと思わざるを得ない。

＜私＞はと言えば、＜長崎ちゃんぽん型＞とでも言えるのかも知れない。教室に入ると最初にBGM（バック・グラウンド・ミュージック）を流しながら《Mademoiselle AOKI, Mademoiselle SATO, Mademoiselle TANAKA……》マドモアゼルと言う具合に出席を取り、40分ほど教科書を進めてから、気分転換に1、2年前の『NHK テレビフランス語講座』であるとか、娯楽番組からダビングして置いたフランスの文化・歴史・生活に関するものを見せたり、シャンソンやフランス民謡を楽譜付で教えたり、学生が眠そうな時を見計らって、全員を立たせ、5人位単位で1列に並ばせ、目の前の人の両肩を揉ませ、1分15秒してから向きを換えさせ、再び1分15秒間肩揉みをさせてから肩たたきに移らせる。その5分間は陽気なアコーディオン音楽を流し続ける。再び席に着かせると、日によって、フランス語の文章の朗読をアメリカ人風・イタリア人風・スペイン人風・フランス人風・タイ人風、そして日本人風（山形弁や京都弁）に物まねしたり、フランス文化に因ちなんだパリ・南仏・東京での体験を話して聞かせたりという風に、BGM（バック・グラウンド・ミュージック）あり、肩たたきあり、一流歌手のシャンソン鑑賞ありと、メニューが多過ぎて教師、学生共々持て余し気味になってしまう。確かに『卓袱料理』しっぽく程の豪華さはないが、『ちゃんぽん麵』位の具は備えている。

何十年か前のクラスならば、一様に喜んでくれて、賞賛してくれたものであろうのに、昨今に至っては学生の表情に活気がなく、ギャグを言っても笑わず、テキストを復誦させても気のない声でしか読まず、歌を教えても蚊の鳴くような声でしか歌わず、ビデオを見せても眠っていたり、携帯電話を操作したりもする。勿論、中には真面目で真剣な学生はいる。レポートなどはきちんとした字で丁寧に仕上げてくる。しかしながら、総じて表情に潤いが乏しく、目が合った時に、気持ちの通わない、冷やかさが通り過ぎていく。そのような場合、うっかりと「昔の学生は反応が良かった。」などと口走ってしまうと、空気がさらに悪くなってしまう。

実践女子大学で2年間非常勤講師を勤めてから、晴れて私が専任講師として採用されたのが、1976年（昭和51年）だった。相撲で言えば「幕下」から、人並みに生活出来る「十両力士」に昇格したようなものだった。

「やっとな人前いちにんまえになった！！」と私は心の中で幾度となく叫んだ。

桜美林大学を3年間、立教女子短期大学を4年間、玉川大学は何と23年間も勤めさせて戴いたのである。かくして現在は実践女子大学一筋ていねんとなって定年まであと3年と迫って来た。

教壇に立って以来36年間、何人の学生を教えて来たのだろうかと振り返ってみると、

大雑把な計算で3,000名位だろうが、自発的に思い出される顔は10名足らずなのには驚き呆れてしまうのである。〈一人の人間〉の頭と心も時の流れに揉まれながら新陳代謝^{しんちんたいしゃ}を絶えず行い、古いものを少しずつ焼却して行かざるを得ない。そうした時の〈保存〉というのは人間の個人又は集団の力によって為される偉大な知恵である。書物、記念物、資料、音楽、絵画等、多くの手を経て今日に於いてまでも我々の感性と理性とを直に刺激^{じか しげき}し、想像力と創造力とを掻き立たせてくれる。

毎年恒例の実践女子大学・英文学科卒業生の世話で『英文科会』という組織による新年会が都心のホテルで開催されている。出席者は70歳代から40歳代まで位の卒業生が2, 30名と5, 6名の大学・短大を含めた先生方である。私の場合、1999年（平成11年）6月13日（日）に『英文科会』から講演を頼まれ、『英語からフランス語へ』という題で90分程話をしたのがきっかけで、その翌年から新年会の通知を戴く事となり、爾来欠かさず出席している。しかし、まだ1度も教え子に出会った事がない。ということは出席の先生方の中で私が一番若いと云う事なのである。残念なことに常連の先生方の中で、3名が他界された。成田迪子先生^{みちこ}、小泉清明先生^{きよあき}、そして佐藤吉介先生^{きちすけ}である。

この会は何故か大抵フランス料理のフルコースで行われている。デザート頃になると各先生方のスピーチが始まる。「あいうえお」順で伊藤廣里先生、小木曾雅文先生、鈴江瑋子先生^{あきこ}、高橋雄四郎先生、山脇百合子先生、そして最後に若輩の私がシャレソレを1曲歌うというのが近年の流れになっている。

実践女子大学・英文学科のかつての重鎮^{じゅうちん}（学科主任、図書館長等）の先生方に混じってフランス語担当の二人（故小泉清明先生と私）がこの会の常連だというのが、ちょっとユニークな感じがする。

実践女子短期大学・英文学科のお二人（小木曾雅文先生と故佐藤吉介先生^{きちすけ}）からフランス文学に関する貴重な文献を送って戴いたのは、この『英文科会』が縁となつたのである。

小木曾雅文先生から20冊ほど、今は亡き佐藤吉介先生^{きちすけ}からも10冊ほど送って戴いた。その中に『仏蘭西文学』（上）（下）辰野隆著（白水社 昭和21年）が目にとまり、夢見心地に感動した。この本は40年以上も前に（1963～68年、私が立教大学・フランス文学科の学生の頃）、明治大学付近の神田・神保町や早稲田大学に通じる戸塚2丁目通りの古本屋を探しても『下巻』の方には出会った事がなかったのである。当時、『上巻』だけで確か6,000円だったと記憶している。

英米文学専攻の先生方からフランス文学に関する数々の貴重な古本を頂けるとは望外の喜びであった。

平成14年（2002年）5月8日付けの今は亡き佐藤吉介先生^{きちすけ}のお手紙の中に私の〈授業法〉についての心温まるお言葉がある。

『貴殿のシャンソンの通して仏語教授は理想的です。語学は感性で学ぶもの、悟性ではないです。私は難^{むずか}しい先生がたから難^{むずか}しい顔で教わりました。暗くなります。これでは駄目です。ましてゼミ等で強要するのは不可。』

しかしながら、私のシャンソンの授業は5、6年前から破綻をきたしている。授業中に楽譜を配り、フレーズ毎にメロディーを歌って聞かせ、言葉の発音と意味を伝え^{のち}た後、クラス全員で斉唱すると30分位の時間を費やすことになる。週2回の授業で、20回位経てから一人一人暗譜で皆の前で歌わせていたのである。

♪『ラ・メール』、『枯葉』、『詩人の魂』、『さくらんぼの実る頃』、『パリの空の下』、『オー・シャンゼリゼ』、『パリ・カナイユ』、『サン・トワ・マミー』、『シェルブールの雨傘』♪♪……

昔の学生はこのような難しい曲をほとんど全員が覚えて来てくれた……

5、6年位前に信じられない事が起こった。英文学科1年生の選択必修のクラスに夏休みの宿題として、授業中に練習した1曲を暗譜してくるように置いて置いたのであるが、誰一人としてやって来なかった……私は憤りを乗り越^{むな}して空しさを味わった……その時、「昔の学生は……」と口走ってしまっただが、自分の語氣に力がないのに気がついて、つまらない駄洒落で方向転換^{はか}を図って見たものの笑ったのは私だけだった。

もっとも、その年度から週2回のクラスを1クラスずつ異なる教師が担当する事になってしまって、シャンソンの時間が十分でなかった事が原因だったのかも知れない。

それ以来、シャンソンのテープを流す事があっても一緒に歌うことを止めてしまったのである。意識的に中断したというよりも、＜自然のながれ＞とでもいうような雰囲気^{雰囲気}に私自身が順応してしまったのである。週にたった1回の授業の中で、30分もかけてシャンソンの稽古をするというのは、歌うことが不得意な人やシャンソンにそれ程興味のない者にとっては苦痛であるのかも知れないし、時間の無駄だと感じさせているのかも知れない。

確かに、3年程前から実践女子大学も取り入れた『学生による授業評価』で私のフランス語の授業に関しての学生からの要望の中にそれに類する意見が2、3あったのを記憶している。

『学生による授業評価』(無記名)にも個人的なく好き嫌い＜の感情が反映されていて、この事は世間一般にも通じるものである。即ち『坊主憎^{にく}けりや袈裟まで憎^{けさ}し』』という感情による判断基準が公に記録されてしまうのである。

一例として「教師の声は聞き取れたか。」というマークシート式の設問に対して5段階中1つを選ぶ場合、「全く聞こえない。」に値する①を塗りつぶすような学生が10名中2、3名位はいるのである。

何はともあれ心機一転、2007年（平成19年）の前期のクラス：『フランス語C』、『フランス語演習A・B』（2クラス）の中で、再び「歌」を取り入れて見た。そしてそれらのクラスに対して、4月から5、6回やって来た私の授業についての感想文を1、2枚程度のレポート（英文学科の学生は英語、他学科の学生は日本語）にまとめて提出させたところ、この「歌」が思いの外好意的に迎えられていて、久し振りに私は気を良くしたのである。

語学の時間に歌をクラス全員で歌ったことが新鮮だったと書いた学生がかなり居たのである。

（『泉のほとりにて』、『円卓の騎士』、『月明かりで』、『サレジャンの祭り』……）

これらは近・現代のシャンソレではなく、民謡または童謡の部類の歌であるけれども、そのメロディと詩が古い時代のフランスの趣きを湛えていて、子どもの頃に本や劇、又は音楽を通して触れたことのある懐かしい情趣へと誘ってくれるのであろう。

相手が目を輝かせ、親愛の情を持って話を聴いてくれる時ほど嬉しいことはない。

最近では2、30人規模のクラスになると雰囲気「無気力さ」が漂っていて、やり難い。睡眠不足なのか机に顔を付けて眠り続ける常連の学生が増えて来ている。

私は通常、そうした学生をそのままにして名簿順に質問をしたり、教科書を読ませたりしているが、たまたま睡眠中の学生に当たった時には敢えて起こさず、その学生の履修者名簿欄に「-3」と記入して置く。減点の事を時たま授業中に伝えても、ほとんど変りがない。

ある時、「授業中眠る人には定期試験の点数に15点をプラスする。」と、ひょっとした思い付きながらも、かなり真面目に通告したことがあった。「眠る人は授業を聴いていないのだから答えが書けないだろうと思う……」

2、3名の学生がちよっと笑ったが他の20名位はぼんやりと私の方を見ているだけであった。そして次の授業で今まで眠ったことのない学生までが2、3名居眠りするようになったのである。

この逆説的な私の採点方法は後から考えて見ると、それなりの計算が成り立つ。

「居眠り学生」が、運わるく当たってしまった場合、3点の減点があって、5回も減点されれば、結局マイナス15点になってしまう。

学生に対する成績評価は定期試験の素点だけに拠るものではない。素点だけで成績を出してしまったならば、恐らく2割程度しか合格しないであろう。そこで実際の試験の結果を見て、全員に10点から20点位の下駄を履かせる事になるのである。こじ付けめいているけれども、授業回数12、3回を点数に換算して、10点乃至20点満点として置いて、欠席回数で1点ずつ減点するという方法である。

昨年（2006年）度から私はどのクラスの学生に対しても「毎回レポート」というのを始めた。

課題はB5の横書きレポート用紙に1枚、教科書をそのまま手書きで写すというものである。表紙を付け、ホッチキスで止める事が要求されている。出席を取る際に本人が直接私に手渡さなければならない。後日の提出は認めるが、減点される。

大部分の学生はきれいな字できちんと仕上げてくる。回が進むにつれて習慣となり、手渡しに来る学生の表情に生気が^{みなぎ}漲ってくる。出席数がレポート提出数と大体一致することとなり、レポート提出一回を2点（後日提出は1点）として置くと、期末試験の素点に下駄を履かせた「学習評価」の総合点を決める時の手掛かりとなる。

実践女子大学の「定期試験」に際して受験者への「通達事項」として、当初から私は全て持ち込み可としている。

この事は語学の試験においては極めて異例であると私も認識している。

語学は暗記する事が基本であり、この事を怠れば身に付く筈がない。受験生を安易な気持ちにさせ、勉強しないで試験に臨む者が増える……という懸念が起きて当然である。

全て持ち込み可といっても試験範囲を授業中に学習した所より2課位先に設定して置くのである。熱心な学生は一生懸命になって自習し、質問にやって来る。

10年前以上にもなるが、クラス全員が分担して授業中に学習してない所をやって来て、学生同志互いに用紙を手渡していたのを目にした事がある。

全て持ち込み可の利点は、受験生が時間を目一杯使って、自分が持って来た辞書、参考書、ノート、教科書等を総動員させながら試験問題に取り組む事である。60分の試験で、45分で一度だけ退出が認められているが、誰一人として席を立つ者がいない。もし仮に持ち込み不可とすると、暗記して来なかった者や、日頃怠けていた者にとっては、手持ち無沙汰となり、45分までひたすら耐えて待たなければならないであろう。そして空虚な気持ちで教室を後にするであろう。何か道具を持ってさえいれば、それを使って最後まで懸命の努力をした^{のち}後に自分の実力を自分自身で認識するであろう。こうした試験は普段の授業の2、3倍の効果があるのではないだろうか？

いずれにしても、試験の結果は平均50点位なので、下駄を履かせて収まるのである。

フランス語の教授法も盛んに研究されていて、『日本フランス語教育学会』では年に2回、東京と地方で全国大会を開催している。最近では特にコンピュータを使った統計に基づいた発表が、主に若い研究者によって行われている。その努力と工夫は認めなければならないだろう。しかし何事においても行為というものは、結局のところ個人的なものなのである。研究者を目指す人にとっては、「研究業績」として詳しい調査結果を報告しなければならない。そしてそれに基づいたより良い「教授法」なるものを編み出さなければならない。

しかしながら、学ぶ側からしてみれば、マニュアルに^そ沿った授業よりも、教師の自然発生的なアドリブが盛られた授業の方が印象に残り、実生活において将来の役に立

つのではないだろうか？

持論になるけれども、「研究者」は正確なデータに拠る「精細さ」が第一であり、「教育者」は生活の息吹とも云うべき「精彩さ」が望まれるのである。

したがって、真の「研究者」とは、授業を忠実にこなしながら、図書館・研究室に最も多く足を運ぶ人のことであり、「教育者」とは、学生と授業を念頭に置きながらも、図書館・研究室よりも寄席・芝居・音楽会の方に興味がある人、ということになるであらう。

ここで学生の側からの『フランス語の授業』の感想文を掲載して見たいと思う。

次の文章は1991年3月末日締め切りの「フランス語(中級)」春休みの課題であった。

春休みの課題というのは後期の学年末試験の追・再試験のレポートならばともかく、普通あり得ないのであるが、当時私は英文学科の2年生のフランス語クラス全員に対して『フランス語の授業』の感想文を英語で書き、そのフランス語訳に発音記号を添えることを要求したのである。その結果、ほとんど全員がそのレポートを提出してくれたのである。

～ My impressions of French ～

I learned French for two years, but I can't speak French anything. I can only pronounce some words without seeing phonetic signs. French had been a strange world for two years. I regretfully could not feel French close to me.

However I think that this language is very beautiful, and the pronunciation is soft and elegant. Therefore I think that it resembles a Kyoto accent.

I was very glad I got an opportunity to learn French. I could not sing French songs well, but I will not forget them. Thank you very much for two years.

1991年当時、実践女子大学・英文学科では2年間、同じ教師が同じクラスを、週2コマ必修で授業を行っていた。書かれた英文は分かり易く、文法上の誤りが見当たらない。

《英語からフランス語へ》

[me zēprsjō syr l frāse]

Mes impressions sur le français

[ʒ apri l frāse dφ z ā mē ʒ n pφ pa parle l frāse pa dy tu]
Je appris le français deux ans, mais je ne peux pas parler le français pas du tout.

[ʒ se tu ʒyst prōnōse dy mo sā vwar sin d la prōnōsjasjō l frāse]
Je sais tout juste prononcer du mots sans voir signes de la prononciation. Le français

[ave tete yniver etrāʒ dφ zā ʒ n s py raprōʒe d la frāse a mō]
avait été univers étrange deux ans. Je ne se pus rapprocher de la français à mon

[rəgre purtā ʒ truv k s lāgaʒ ε tre bo e la prōnōsjasjō ε dus e]
regret. Pourtant je trouve que ce langage est très beau, et la prononciation est douce et

[elegāt osi ʒ truv kil rəsābl a laksā d kjoto]
élégante. Aussi je trouve que il ressemble à l' accent de kyoto.

[ʒ fy tre zoerφz k ʒe y lōkazjō d aprādr l frāse ʒ n py jāte]
Je fus très heureuse que j' aie eu l' occasion de apprendre le français. Je ne pus chanter

[jāsō frāsez bjē mē ʒ n le zublire pa]
chansons Françaises bien, mais je ne les oubliais pas.

[mersi mil fwa dφzā]
Merci mille fois deux ans.

上記のフランス語の文章は同じ学生によって書かれた英文仏訳である。

下線の部分に修正を施してみた。

Je appris le français / deux ans, mais je ne peux pas parler le français pas du tout.
J' ai appris pendant je ne sais pas du tout parler français.

Je sais tout juste prononcer du mots sans voir / signes de la prononciation.
Je ne sais que prononcer des mots les

Le français avait été univers étrange / deux ans. Je ne se pus rapprocher de la
me mettait dans le monde étrange pendant Je ne me suis pas rapprochée du
français à mon regret.
français

Pourtant je trouve que ce langage est très beau, et la prononciation est douce et

élégante. Aussi je trouve que il ressemble à l' accent de kyoto.
qu' il

Je fus très heureuse que j' aie eu l' occasion de apprendre le français. Je ne pus chanter
J' étais j' aie d' apprendre Je ne chantais pas

chansons Françaises bien, mais je ne les oublierai pas.
bien les chansons françaises

Merci mille fois / deux ans.
pour vos leçons pendant

上記のフランス語は第二外国語・選択必修クラスの英文学科二年生のかなり優秀な学生によって書かれたものである。

基本的な誤りが随所に見られるが、苦勞して書かれた跡が感じられるのである。

「単純過去」という文法時制は日常の話し言葉にも書き言葉にも用いられない。

この学生は恐らく「単純過去」が書き言葉だけに用いられるという事を肝に銘じていたのだらうと思われる。「接続法」まで使っているのには感心させられてしまう。いづれにしても週2回・2年間の学習の成果が表われている。

立教大学フランス文学科の3年の時から私はフランス語の日記を書き始めたが、文章力に関して、当初の私よりもこの学生の方が優れていると密かに恥じ入ったのである。

何をもって外国語をマスターしたかという問いに関して、答えに窮してしまうけれども、1つの目安として私は作文力が挙げられるかと思う。

つまり文法的な誤りの少ない文章を時間をほとんど使わずに書けるということである。

多くの若者は日常会話の習得をもって外国語をマスターしたと取るであろう。学生たちは1, 2年間の授業を受けた結果、《Bonjour!》と《Merci beaucoup!》しか話せないと言って嘆くのである。

実のところ誰一人として外国語をマスターした人はいないのである。母国語でさえ間違えるのは日常茶飯事である。

滑らかに話が出来、素早く手紙が書け、電車の中でも原書が読めるような人を外国語をマスターした人と呼ぶべきなのであろう。会話といっても話題によって程度が異なるし、手紙や原書もそれぞれのレベルによって相当な開きがある。して見ると私のレベルは中級程度であって、決して上級には達していない。それ故に私の36年にも及ぶ現在までのフランス語教師としての立場は私の実力に全く相応しかったと思わざるを得ないのである。即ち、私はフランス文学科の教師ではなく、英文学科やその他の学科に置かれている第二外国語の担当教師なのである。1年生には全くの基礎から、発音や文法を手解きし、2年生からは文学作品、歴史、観光、料理などを扱ったテキストを使う。合間にシャレツェンを教えたり、映画を見せたりと極めて気楽な授業を続けて来たと言っても過言ではない。

学生の側からして見れば、フランス語は専門ではなく、教養または趣味の領域なのである。気楽に和やかに学べるような雰囲気が好きなのであろう。ところが私は、得てして学生に厳しい注文を出し、成績評価も辛いのである。その仕返して、学生による私に対する授業評価は芳しくない。

何はともあれ、私は現在の自分の存在価値に満足しつつ、授業の準備をそれなりの工夫を施しながら、充実した気力と体力を学生の前に表わすことを歡びとしている。

(2007・11・17記)

《“The Viewpoint of a Professor of French”》

Hiroyasu TOGASAKI

I have been a professor of French for thirty-five years and instructed more than three thousand students in that time. Unfortunately, I remember only a few of these students.

I enjoy teaching French and I have never considered leaving my profession.

I do not have a particular scientific method for teaching French. Actually, I would say that I use my own method combining the usage of music and videos and a comparison of French grammatical pronunciation points with the same points in other languages such as English, Italian and Spanish. Also, I instructed using psychological references based on my experiences that have taken place in the past and in the present. These references have sometimes surprised my students as I am prone to use humor in the classroom. My humor tends to make them feel comfortable or even uncomfortable at times. It is my view that the students of today seem to have lost some of the passion and hope that were exhibited by the students of twenty years ago. In spite of this obvious loss of interest, I continue to use the same personal method that I used in the past.